

鳩木節子の後日
甘木数彦

第七章

—

広場に降り立った節子を待っていたのは、見慣れた男ではなかった。昆虫をモチーフにした美しい甲冑で顔まで隙間なく覆われた、美しい存在だった。

白い光沢のある全身が、陽を受けて輝いている。よく見れば透明感のある淡い虹色の膜が白い表面を包んでいて、複雑な色合いを付け加えていた。全体の有機的な曲線が優美さと威厳を生み出している。それこそが伊助の変身した姿だった。

節子は初めてその姿を目にして、自分の醜さを恥じる気持ちが抑えられなかった。急に、自分が裸であることを強く意識してしまう。

「同じ改造人間でも、俺たちは違う技術で作られている」

伊助が先に声を掛けた。その言葉に節子は少しだけ、落ち着きを失う。自分の方があとの技術で改造されたぶん、基本の部分で優れている。その前提がいきなり覆われてしまったからだ。押さえつけている恐怖心が自由になろうと暴れだす。

「この格好は何年ぶりだろう。正直、うまく変身できるか自信がなかったんだが。自転車の乗り方と一緒にだな。一度憶えればあいだが空いても上手くいく」

伊助の声は変身前と同じだった。節子は黙って身構える。羞恥心はよく馴染んだ闘争心によって、後退していく。

「どうした？」

伊助の声が聞こえたと思ったとたん、節子の体は後方へはじき飛ばされていた。

「悪いが、負けるつもりはない。目的があるからな。それに、痛いのは嫌だ」

馬乗りになった伊助から何度も殴られる。普段なら見切れそうな動きでさえ、かわせない。

「ずいぶん、今日は喋るんですね。それが素なんですか？」

痛みを無視して節子は言った。いつにも増して酷い声だった。

「舌、噛むぞ」

節子は笑みを浮かべたが、変身した体では口元がひくつくだけだった。

実戦から長らく離れていたせいか、伊助の動きにはキレがなかった。節子は一瞬のタイミングを見計らって、伊助の拳へ食らいついた。ノドを潰されるより先に、牙が手首を捕らえる。

節子は必至で首を振った。金属がこすれるような音。押さえつける力が弛んだすきに、節子は伊助をはねのけて立ち上がる。そのまま足を踏みおろしたが、伊助は転がってそれを避ける。

「こうやって向き合うと、お前なかなか凶悪な見かけだな」

仮面の向こうで、伊助が顔をしかめたような気がした。節子を再び羞恥心が襲う。闘争心を掻き立てようとして、節子は牙をむいて唸ってみせた。

伊助の体が沈み込んだかと思うと、節子へ向かって飛び込んでくる。節子は体をひねってかわそうとしたが、伊助は少し手前で足を伸ばして反動で進路を変え、横から蹴りを放ってきた。

節子はなめらかな曲線を描く伊助の脚をつかんで、思い切り伊助を投げ飛ばした。土をえぐり、伊助の体が地面の上を滑る。

勝てる。節子は確信した。その結果が意味することも気にならなかった。構成員と戦っていた感覚が一瞬で蘇り、体中に力が沸き返る。

節子は伊助が立ち上がるよりも先に駆け寄り、その顔へ蹴りを入れる。工芸品のような頬の表面にヒビが入る。隙間から赤黒い体液が染み出してきた。

「楽しそうじゃないか。節子。お前本当にこういうのが好きだな」

思わず否定しそうになって、節子はのけぞった。走り寄った伊助の突き上げた拳が、節子の牙を直撃したのだ。がら空きになったボディへもう片方の拳が埋まる。

節子は吐きそうになるのをこらえた。殴られた方の牙が折れ、足元に転がる。節子はのけぞった体勢から頭を振り下ろした。伊助が離れる。

二人はしばしにらみ合った。吐き気の治まらない節子の腹が脈打っている。勝てると思った自分の甘さを節子は後悔した。

伊助が踏み込んでくる。その右手が前に突き出されていることに気付き、節子は後ろへ飛び退いた。それまで節子のいた場所の土が吹き飛ばす。壁を壊したのと同じ衝撃波だ。

「言っただろう。別の技術で改造されたんだ」

再びにらみ合いが続く。

それからどれほどの時間が過ぎたのか。一瞬が数分に引き延ばされ、数分が一瞬に圧縮される戦いの場であって、節子は時間の感覚を失っていた。

伊助はひさびさの手強い相手だった。死力を尽す感覚、勝ちが見えない重圧感。節子はひたすら戦いに集中し、無感覚になっていった。意識が加速し、互いの動きが永遠の果てから繰り出されているような気がした。

しかし、二人の肉体は着実にダメージを蓄えていた。全身が分解しそうなほどの疲労と痛みが、二人の動きをにぶらせる。やがて応酬が止まった。二人は距離を取って立ち尽くす。

節子は体中から血と粘液を流していた。左腕が体の脇で揺れている。関節を極められ、骨こそ折れなかったがスジを麻痺させられたのだ。突き出たあごの先から、血混じりのよだれが地面へ落ちる。

伊助も深刻なダメージを受けていた。身を鎧う外甲はあちこちがひび割れ、欠け落ちた下から黒っぽい肉が見えている部分もある。目の下にできた亀裂からは今も血液が流れ出し、顔を朱に染めている。

どちらも限界に近いことは明らかだった。動きを止めたことで、急速に意識が現実の時間と同調する。節子は自分の目がかすんでいることに気付いた。伊助も膝へ両手を当て、どうにか体を支えている状態だ。

「なあ。やっぱり、考え直さないか？」

伊助は苦しげに言い、右手と右膝とを地面に突いた。

「いや、です」

節子の返事に対し、伊助は大きな音を立てて舌打ちをした。

「お前、本当に変わらないな。言い出したら妙に頑固なのな」

「よけなお世話、です」

伊助は愉快そうに笑った。

「本当に、俺は首領なんだと思うか？ 忠晴さんや汽一郎を不老や不死にしたのも、俺が仕組んだんだと思うか？ ひょっとして、それもこれも全部、現実化した噂が過去を遡って作り替えた結果なのかもしれない。誰にも真相は解らないが。まあ、それを言うなら俺たちが自分の身に起こったと思っていることもすべて、噂が現実化したものなのかもしれない」

「それなら伊助さんだって、初代首領や組織という存在の、噂が、現実化するよう、踊らされてるだけな、んじゃないですか？」

「ま、そうかもしれないな」

伊助はあっさり認める。

「そんな理不尽なもの、絶対に受け入れません。伊助さん、私はあなたやみんなを、必ずこの馬鹿げた仕組みから」

笑おうとして、伊助は咳きこんだ。

「まあいい。お前はお前で、好きに生きろ。時間はたっぷり残ってるんだ。俺や歴代の抵抗者がたどった思考を、ゆっくり追いかける余裕だってある」自分の重さに耐えかねるように、伊助の右手が土の上をすべって前に出る。「ただなあ節子。考え詰めればけっきょく俺たちは二人とも、初代首領の始めた遠大な仕掛けから外へは出られないんだ」

さらに右手が前に出る。伊助の肘は今や、まっすぐに伸びていた。

不意に重たい衝撃が両足を襲った。衝撃波だと気付いたときにはもう体が前のめりに倒れ、地面はすぐそこだった。

目覚めると、節子はゆっくり周囲を見回した。あたりには誰もいない。昭平がいた場所の周辺は、土がえぐれて大きなくぼみができている。節子は立ち上がるうとして、両足の痛みにも再び倒れた。呼吸を整えて痛みが去るのを待つと腹這いのまま両手で上体を起こし、腰から下を引きずるようにして一番近くの塀まで進んだ。そこで壁に背中を預ける。

見上げると、太陽はまだ中天高くに輝いていた。蒼空の上の方を薄い雲が急ぎ足で通り過ぎていく。

心の中から大きなものが抜け落ちているようだった。しばらくして節子は、それが憂鬱さだったことに気付く。最悪の状況なのに、なぜだか笑みが浮かんできた。くっくっと、ノドを鳴らして笑い声が漏れる。自分でも何がおかしいのか、よく解らなかった。一番大事な人と殺し合いをし、最悪の関係で分かれたというのに。

きっとこれが変化ということなのだろう。組織との戦いへ身を投じる前は日常的にあっただはずのことなのに、今では生まれて初めて体験するかのようだった。

戦いを通して感じていたのとは別の変化。目的へ向かって直進するのとは違う、まるで連続性のない変化だ。

誰かが塀を越えてくる。節子は物音のする方を向いた。塀の向こうに積み上げられたガラクタを越えて、汽一郎が顔を覗かせた。

節子は手を挙げて、無事であることを知らせようとした。しかし、その手は他人のもののように重く、節子は少し持ち上げるだけでもずいぶん苦勞させられた。なんだか、またおかしさがこみ上げてくる。節子は汽一郎が近付いてくるあいだも、まだ小刻みに肩をふ

るわせ、声もなく笑っていた。

終章

節子は自分の部屋で独り、座っていた。損壊した壁の修理はまだされていない。早くも砂ぼこりが、床へ薄く積もりはじめている。寝起きは別の部屋でしているが、布団以外はまたそのままだった。

汽一郎の話ではあの日、伊助から「着替えを持ってすぐ工場跡へ行くように」という内容メールが届いたのだという。そこで汽一郎は自分の持っている服から節子でも着られそうなものを選ぶと、急いで工場跡へ向かったのだった。

変身を解くと、節子は汽一郎から受けとった服を着て、体を支えられながらアパートへ帰った。全身が血で汚れていたが、シャワーを浴びる気力もなくそのまま眠り込んでしまった。

病院へ行ったのは翌日のことだった。普通の病院で診察を受けると騒ぎになりかねないので、ヨ号組織対策委員会の指定病院を利用した。あちこちに打撲と裂傷。麻痺したスジも当分は治りそうにない。こうして部屋で椅子に座っている今も、まだ呼吸をするだけで体中が痛む。

伊助はあれっきり、どこかへ消えてしまった。汽一郎へメールを送った携帯電話も、破壊されたのか反応が失われていた。

節子は誰にも真相を話さなかった。組織の生き残りに襲われ二人で戦ったが、節子は攻撃を受けて途中で意識を失ってしまった。おそらく伊助は生き残りを追ってどこかへ行ったのだろう。コキドーハイツの人々や委員会にはそう説明した。

香奈と汽一郎は節子の説明を信じたようだった。忠晴と昭平はそれが事実ではないと察したようだったが、なにも言わなかった。委員会も沈黙している。対策を協議しているのか、協議された対策に基づいた行動なのか。

香奈の中で、組織との戦いはようやく本当の終わりを迎えたように感じられた。それは伊助と自分との関係が一度リセットされたということでもある。

要するに自分はフられて、ようやく初恋のようなものが終わったのだ。節子はそんなふうにも考えていた。思えばずいぶん長い「初恋」だったわけだが。

もっとも、それが本当に恋心なのかは判らない。限られた人間関係の中で芽生えた、ただの執着なのかもしれない。あるいは、同じ境遇に置かれた者として惹かれていたのかもしれない。それを見極めることは、もう永久にできないかもしれない。

やはり失われた伊助との関係を惜しむ気持ちはあった。けれどもそれは思っていたよりもずっと、じっくり節子の感情によく馴染むものだった。心地よくはないのだが、かといって辛くなるものでもない。

伊助が生きている以上、組織はいつの日か活動を再開するはずだ。おそらく、コキドーハイツの人々を狙ってくるだろう。

そうなれば節子は全力で香奈たちを守るつもりだった。もし伊助の言葉が本当なら、彼女たちに数奇な過去を与えたのは自分ということになる。それなら、自分には住人たちの平穏を守る義務がある。

たとえ伊助の言葉が間違っていて、それでも節子はみんなを守りたかった。正体を偽ることもなく、利害や職務も抜きで続けられる関係。もう遠い過去の記憶に残っている家族や友人は、たしかにそんな存在だったはずだ。

それに、たとえ不確かで噂によって改変されたものでも、「いま知っている現実」こそが節子にとっては唯一の現実だ。だからその現実の中身がどんなに変わっても、節子からすれば周囲の人々との関係は常に同じ、「他に代わるものがない」特別な関係なのだ。

とはいえそれらは別の流れであって、家族を殺されたことに始まる一連の流れとは、もう別物のような気もした。

そもそも節子は伊助を放っておく気などなく、どうにかして探し出すつもりでいた。伊助を見つけてどうするのか。言ってやりたいことは山ほどあるが、はっきりとした考えはない。

だがそのときが来れば、答えは自然と出るような気がした。また戦うのかもしれないし、もっと別な展開になるのかもしれない。

吹き付ける熱風を正面からとらえ、節子は小さくうなずいた。それは何気ない仕草だったが、待ち受けるものや情報技学という理不尽な仕組みに、あくまでも抵抗するという決意の現れだったのかもしれない。

背後でドアが開いた。振り返ると香奈が立っていた。少しずつ人の顔が判るという状況に慣れてきているようで、誘拐されていたとは思えない元気さだ。最初の頃は香奈の飲み込みの早さを不思議に思ったりもしたが、もともと適応能力が人並み以上に優れているようだった。物心が付いたらまず最初に、引き継いだ記憶やそこから得た知識と折り合いを付けるということを繰り返してきたためかもしれない。

今にして思えば、香奈を連れ去ったのはほぼ間違いなく伊助だったのだろう。その後に関った出来事を考えれば、あのタイミングで他の誰かが香奈を連れ去り、そして何もせず連れ戻すことなどありそうにない。

おそらくどうにかして刺激を与え、事態を動かそうとしたのではないか。節子をとおしてコキドーハイツの人々を不死者にしようと考えていたのなら、伊助自身が裏から介入することで進行を促すというのにはあり得る。結果的に、それは上手くいった。

香奈は忠晴との話も上手くまとまったらしい。汽一郎も含めた三人の関係は、はたで見ていると拍子抜けするほど急速に善転している。

「珍しいですね。お店は休みなんですか？」

戸口に立った香奈へ、節子は声を掛けた。

「まあね。それでさ、これからフライングエイブに行こ。今日は年に一度のお客様感謝デーで、昼間っから営業してるから。当日だけの限定メニューなんかも格安で出してて。まあ、本当は今日ってあいつの誕生日でさ。そのままだと忘れられたりしそうだから、ってことでわざわざ感謝デーとかいって人を集めてるんだけどね。ホント、そういうところは寒いとか何とか。誰も忘れたりしないのにな」

いかにも嘆くように言うと、香奈はドアの枠に手を掛けた。

「忠晴さんは」

「来ないって。酔っぱらいが大勢いる中にまぎれこんで、ケガでもしたらどうするんだ、だってさ。誰もそんなにはしゃがないのに」

香奈は不満そうだった。

「いえ、案外危険かもしれませんよ。香奈さん、酔っぱらうと手が出るじゃないですか」

「な！ いやあれは冗談じゃない。そんなに強く叩いてないし」

節子はわざと黙っている。

「ちょっと黙り込まないでよ」

「いえ、忠晴さんの肉体が香奈さんの力に耐えられるかどうか……」

節子は微笑んだ。不意に香奈の手が伸び、節子の眼鏡を外す。

「眼鏡、外して行きなよ。私の手があたったらよくないから。悪くないでしょ？ 目」

節子は少し迷って、うなずいた。

「そうですね。眼鏡はもう、やめます」

今度は香奈が笑みを浮かべた。

「じゃあ今日はそのお披露目にしよう。あ、準備が終わったら私の部屋に寄って」

「準備、ですか」

節子はあらためて部屋を見渡した。準備しようにも、ほとんどの物がここ数日で風にさらされ使い物にならなくなってしまった。

てきとうに買いそろえた生活の品々も、こうして失われてしまうと少し寂しい気がして、節子は意外に感じた。けれどもその寂しさは、まんざら悪いものでもなかった。

「部屋はこんなですし、いいです。このまま行きます」

節子は椅子から立ち上がると、香奈と一緒に部屋から出た。ゆびぬき通りは今日も晴れで、強い強い風が吹いている。

(了)

提供：ハムカツ屋

<http://www.hamkatsuya.com/>